慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	最近労働者心理学の一研究に就いて : R.B. Hersey; Seele und Gefhl des Arbeiters, Psychologie der Menschenfhrung, 1935.
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.10 (1936. 10) ,p.1575(169)- 1584(178)
JaLC DOI	10.14991/001.19361001-0169
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19361001-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最近の勞働者心理學の一研究に就いて

—— R. B. Hersey; Seele und Gefühl des Arbeiters, Psychologie der Menschenführung, 1935 ——

藤林敬三

一

アメリカの産業心理學が、他國の研究に先き立つて、經營内に於ける人物處理（Handling people）、換言すれば、勞働者の取扱ひに關する問題を取り擧げ得たことは、能率心理學から勞働者心理學への轉換を暗示するに充分のものであつた。しかしこの問題は、不幸にして最近に至るまで、勞働者心理學への一寄與とも見做さるべき新しい研究を生むではゐなかつた。かくの如き狀態の裡にあつて、即ち人物處理、經營内に於ける勞働者の管理、統卒の問題に關する從來の研究に比較して、R. B. Hersey（Assistant Professor of Industry, University of Pennsylvania）の最近の研究の成果は、正に何人もこれを注目すべき出色の一勞作であつて、吾々も亦勞働者心理學の視角から見逃し得ないものである。即ち次ぎに掲げるものがこれである。

R. B. Hersey; Workers' Emotions in Shop and Home, A study of individual workers from the psychological and physiological standpoint, 1932.

著者ハーシイはアメリカに於ける右の勞働者心理學的研究を公刊したる後、ドイツに招聘せられて、ドイツ勞働者に關して全く同樣の研究を行ふ機會を得た。本紹介文の副題に示して置いたものは、ドイツに於ける彼のこの研究の成果である。そしてこのドイツに於ける彼の研究は、彼自身に取つては、既にアメリカに於ける彼の先きの研究に依つて確定し得たと信ずる所のものを更らに確實なものとし、進んでアメリカ勞働者とドイツ勞働者との比較研究を行ふことが可能であるといふ期待の下に、行はれたものである。從つて彼の研究の科學的本質に關して、既に彼の先きの研究を通じてこれを知るものに取つては、このドイツに於ける彼の研究は殆んど新しい何物をも敎へてゐない。しかしハーシイの研究に就いては、私自身も極く最近に至つて漸くこれを見得たのであり、アメリカの學者の勞働者心學の研究として、彼のドイツに於ける研究發表を通じて、彼の勞働者心理學的立場を此處に紹介することは强ち無益のことでもなからう。（註一）

註一、讀者中若しハーシイの勞働者心理學の研究に興味を持たるゝものがあれば、私は特に、彼のドイツに於ける研究を先づ通讀せられることを讀者にお薦めして置き度い。その理由は彼の研究の科學的立場とその結果とが此の場合により簡明に、且つより系統的に序述せられてゐるからである、

二

ハーシイに從へば、從來產業經營の問題は經營の組織的並に技術的構成の合理化に盡きて居り、この二面の問題を合目的々に解決することに依つて、經營の能率を最大化することが來ると信ぜられてゐた。しかしこの二面の問題以上に、尙ほ勞働の能率は勞働者の人格的諸要因に左右せられ、また假令へ有能なる勞働者と雖も、時に彼の感情生活の動搖に依つて、彼の作業能率に變化を來すものであることは、吾々の先づ認めなければならない所である。然るに從來の能率研究は意識的にしろ、また無意識的にしろこの全く人間的な要素をば看過し、更らに個々の現象をばそれ自體に觀察して、全體との關聯を求めないことに重大な欠點を有してゐる。かくてハーシイは從本殆んど全く看過せられて來てゐるこの經營の人間的要素、更らに云へば勞働者の最內面的な、根源的な生活としての感情の本質と作用を明かならしめることを以つて、彼の科學的、及びそれに基づく實踐的研究を開拓しやうとするものである。

此處でハーシイの基本問題に對して些か讀者の注意を喚起して置くべきことがある。それは彼が彼の勞働者心理學的研究の主要對象として單に勞働者の感情、乃至情緒生活だけを取り擧げて居ることである。勞働者の意識生活を對象として、何故に彼がその感情生活の一面を摘出するに至つたか。この點に關しては不幸にして彼は詳細な心理學的說明を附加しては居らぬ。其處で敢て彼をしてその研究の出發點を此處に求めしめた心理學的見解を彼に代つて簡單に示せば、凡そ次ぎの如くであらう。彼の先づ關心を持つた問題が、勞働者の勞働に對する主觀的態度の如何に存することは、先きに述べた彼の從來の能率研究に對する批判的態度の裡に、容易に推測し得られる。處がこの勞働態度といふ勞働者の意識は種々なる生活上の客觀的諸條件の變化に對應して現はれる所の、それへの意識的順應過程の主觀的狀態の如何に從つて動搖する。そしてこの意識的順應過程の主觀的狀態を導く所の、最も決定的にして、根源的なる力が感情、乃至情緒の種々なる態樣である。凡そかくの如くにして、彼の勞働者心理學的研究は勞働態度の研究であり、それは勞働過程に於ける勞働者の感情生活の研究に歸着する。

問題をかくの如く限定することの可否は暫らく措き、吾々は先づハーシイの問題設定を辿つて、それが勞働者心理學上の一研究と見做さるべきものであり、且つ從來の特にアメリカの學界には類例のない注目すべき研究である

ことを認めて置かねばならない。

更らにハーシイに依つて問題を展開しやう。凡そ生活上の有ゆる客觀的諸條件の變化は、意識的、若しくは無意識的な何らかの反應を條件づける。從來心理學はこの反應に對してそれの客觀的條件をば刺戟なる術語を以つて言ひ表はしてゐる。處がこの刺戟なる語は人間の無意識的な反應、例へば衝動に對しても用ひられる。これ故にハーシイは特に意識的な反應動作を條件づけるものとして、刺戟に代つて「危機」Crisis, Krise なる新語を利用せんとするものである。

然らば勞働過程中にある勞働者の反應、彼等の感情的順應過程を條件づける危機に如何なるものがあるか。素より勞働者は常に無數の危機に對立して居ると考へられる。しかしその危機なるものは總て同時に個々の勞働者に取つて同一の強さを以つて現はれてゐるものではない。其處でハーシイは總ての勞働者に共通なる主要危機として、次ぎの如きものを擧げる。

(1) 作業、この內に作業の種類、作業の結果、作業の諸條件、職長の勞働者に對する取り扱ひ態度、勞働者仲間の關係等を含む。

(2) 勞働者の身體的狀態、所謂「內面的狀態」の根源たるものを含む。

(3) 經營外の生活諸狀態、即ち家庭に於ける妻子に對する關係、兩親からの影響、婦人との關係（獨身者の場合）政治問題、社交及びその他の享樂に對する豫期、或は想起。

(4) 金錢問題。

(5) 天候。

勞働者に一般に共通な主要危機としてのこれ等の生活上の客觀的諸條件は、勿論時に個別的に勞働者の感情生活に重要な影響を持つことが有り得るとしても、通常多くの場合には、それは單獨にではなく、諸種の危機の復合作用として寧ろ重要な役割を演じてゐる。

危機に關するハーシイの見解に從へば、右の如く、勞働者の勞働態度は諸種の生活上の條件、即ちそれは單に經營內の客觀的事情のみならず、また經營外の勞働者生活の狀態及び政界並に財界の變化動搖等の諸事實を初め、天候及び肉體的狀態といふ自然的現象の變化に從つて變化する。問題のかくの如き彼の理解は私の謂ふ勞働者心理學の科學的研究に全く合致する。（註二）

註二　しかしハーゼイは單にかくの如き勞働者心理學的觀點に立つ許りではなく、勞働者の感情的順應の個人差を說明するために、勞働者各人の人格的相違、特に性格の相違を指摘することに依つて、此處に更らに素質心理學的考察の重要をも認め、それに基づいてまた實際上の種々なる方策を提言しやうとするものである。しかも彼の研究に於いてはこの人間の先天的諸性質の相違よりも、先づ客觀的生活諸環境の影響を詳細に分析することが遙かに重要な地位を占めてゐることは見逃せない。

右の生活上の諸危機――と個人的特質と――を條件として、勞働者個人の種々なる行動が現はれる。そしてこの兩者の間の諸關係を確證して行くことが、ハーシイの研究の主內容をなしてゐるのであるが、此處に觀察せられる行動は次ぎの四種のものである。即ち(一)客觀的行動、(二)情緒的行動、(三)內面的行動（主たる幻想）(四)生理的行動がこれである。しかし彼の研究の主題から觀て最も重要なのは、右の內第二の情緒的行動であり、そして彼自身は別に明言してはゐないけれども、情緒的行動を除く他の三つのものの觀察は、多くは前者の觀察に對する補足的な意味を持ち、或はこの前者と後者とは更らに條件と結果の相互的關係に於いて考察せられてゐる。かくの如

くにして勞働者の意識に於ける情緒的行動、感情生活の推移が觀察の中心對象とせられてゐると吾々は理解して宜しからう。

然らば如何なる方法に依つて右の如き勞働者の諸行動が觀察せられるか。ハーシイの方法を簡單に云へば、それは工場内に於ける勞働者の行動の客觀的觀察と、勞働者自身の自己の主觀的狀態に關する口述に依る報告とからなつてゐる。（註三）しかし觀察の主對象である勞働者の感情生活は右の後の方法に依つて專ら明かにせられてゐるといふ點に、ハーシイの研究の一つの特色がある。そしてこの方法は具體的には次ぎの如くにして行はれたものである。即ち工場内に於いて勞働者の就業中一定の時間的間隔を置いて數回（通常四回、時に三回或は五回）個々に勞働者と面接し、彼等の報告を詳細に記錄する。しかしこの場合に勞働者の内觀報告が果して如何なる程度まで眞實であるか。特にまた彼等がその微妙な感情の推移を如何にして眞實に表現することが出來るか。この點に於いては勿論著者も多少の注意を拂つてゐる。そして特に感情の態樣に就いては、豫め被驗者として選ばれた勞働者との間にその表現に就いて充分の理解を得て置くことにしてゐる。このことはまたその反面に於いては、勞働者の感情生活を分類し、著者の研究結果の整理を容易にしてゐることは云ふまでもない。その勞働者との間に理解せられてゐる感情は次ぎの二十二に分類せられ、それは更らに積極的、中位、消極的感情に總括せられてゐる。（註四）

積極的感情。幸福、少しく幸福、陽氣、希望に充つ、興味を持つ、冗談を云ふ、協力的、積極的中位感情。

中位感情。中位、無關心、混合感情。

消極的感情。消極的中位、不機嫌、疑惑的、無興味、激昂、嫌厭、憂鬱、不安、臆病、憂慮、神經質。

註三、この外ハーシイは夜間、勞働者の家庭を訪問し、またその他の場所に於いて彼等と會談したり、或は著者自身の客觀的行動觀察を補足するために他の觀察者の觀察結果を利用したり、更らに個人的に特異な現象を充分明瞭にせんがために、勞働者各個人の過去の全生涯の事情を追及し、また各勞働者に共通せる重要な現象に關しては彼等の現在の生活狀態を詳細に探及すること、等の諸方法の重要を充分認めてゐる。しかし著者の研究を支へてゐる主たる方法は工場内に於ける勞働者の内觀報告である。

註四、此處に分類せられた二十二の感情狀態は、その記述せられてゐる順序に應じて、大體積極的感情から中位感情を經て消極的感情へ、その强度を低減して行くものであると考へられる。がしかし著者の先きの英語の著作に現はれてゐるものと比較するとその並列順序に僅かながら一二の相違が認められる。

ハーシイの研究は素よりある實踐的目的のために行はれてゐる。このことは著者の次ぎの言葉に依つて明かである。即ち「勞働者をして現實に幸福ならしめ、また不幸ならしめる所の諸要因を確證し、更らに「如何なる諸條件の下に於いて勞働者が最も能率を擧げ、また環境への順應過程に於いて彼等の感情が如何なる役割を演ずるかを確定する」ことが必要である。また右の所言に對して著者の云ふ所に從へば、勞働者の主觀的狀態を考慮外に置いて單に最大能率を期待すべきではなく、精神的にも亦肉體的にも彼等の幸福と滿足の狀態を傷けることなき條件を考慮することが重要である。かくて著者は勞働者の幸福なる主觀的狀態、滿足な勞働態度 —— 更らに勞働能率の增進、災害事故の減少（註五）——これ等の事實を實際に確保せんがためには、各個人勞働者とその生活上の諸種の危機との間に適當な順應關係を作出することが重要となる。この意味に於いて著者の研究の後半は勞働者の生活上の適當なる危機の構成に關し、また各勞働者の人格的諸要因に關する實際的諸提案からなつてゐる。

註五、勞働能率の大小及び災害事故の發生に對しては勞働態度の如何が重要な關係を持つ。そして勞働能率の增進のためには大體積極的感情狀態が、災害の發生に對しては特に感動的な人物が、從つて反對に云へば災害防止のためには感情生活の安定性が重要であることが確められてゐる。從つてこの二つの場合を通じて望ましいことは、勞働者の幸福にして安定的な主觀的狀態を維持することである。

三

以上私はハーシイの勞働者心理學的研究の本質に關してその概要を傳へた。尙ほ彼の研究所產中には甚だ興味あるものも二三含まれてはゐるが、それは此處に割愛して置かう。そして最後に私は彼の研究の本質に關して適當な評論を加へてこの紹介文を終り度いと思ふ。

先づ彼の研究は種々なる點に於いてアメリカに於ける從來の產業心理學的研究、乃至は能率研究に對して新しい問題を投下してゐる。即ち第一に、前述の如く、勞働者の感情生活を研究の對象とすることに依つて眞に經營の人間的な要素を摘出してゐること。第二には從來アメリカに於ける人物處理の問題、換言すれば經營內に於ける勞働者の管理、統率、指導のための能率心理學的研究が、單に常識的な皮想な心理學的知識、經驗に基づいて說かれたり、或は單に科學的心理學的、特にまた社會心理學的知識の演繹的利用に過ぎなかつたりしてゐる狀態に對して、勞働者の具體的意識生活の歸納的研究の範を示したること。そして第三にはアメリカの學者の研究としては珍らしくもハーシイは被驗者數の多數であることを以つて彼の研究を確實にしやうとはせず、寧ろ小數の勞働者の質的に愼重な分析的研究を行つてゐること。從つてこの點では未だ彼の研究は或は量的に不充分であると見做されることがあつても、その質的な研究は充分その不足を補つて居り、吾々はまたかくの如き愼重な研究が漸次蓄積せられて行くことを寧ろ希望するものである。第四に從來アメリカに於ける產業心理學的研究が一方に於いては產業精神衞生學として、專ら勞働者の變態的、異常精神狀態の研究に集中してゐるのに對して、著者は精神病學的問題を提出する所の勞働者ではなくて、正常勞働者を研究の對象として選定してゐること。第五に更により重要なことは、從來產業心理學は勞働生活の環境條件を論ずるとしても、それは個々の客觀的條件を全く他のものから遊離して、それ自體獨立に重要なものと見做すのが普通であり、また各個人の知能といふが如き素質的要因をそれ自體の重要さに於いて研究しやうとする。これに對して著者は各個々の勞働者を彼の全環境に依つて條件づけられたる狀態の下に於ける統一體として分析することの重要を認めてゐる。換言すれば從來能率心理學に於いて寄木細工的に、且つ抽象的に考察せられてゐた人間が、統一的な、具體的な、ありのまゝの人間として研究の對象とせられてゐること、かくてこそ初めて「ものを云ふ機機」ではなく眞の人間が吾々の問題となり得るのである。

ハーシイの研究の以上の如き諸特徵は總て、彼の研究をして勞働者心理學の研究と見做され得る充分の根據を示すものであり、これが從來勞働者心理學の研究を知ることの最も少なかりしアメリカ學者の手に依つて自ら開拓せられるに至つたことは、吾々の正に刮目すべき事實である。

しかしこれに反して、吾々はハーシイの研究に對して尙ほ二三の點に批判の目を蔽ふことは出來ない。先づ、前述の如く、彼の研究は究局勞働態度の問題に歸着するのであるが、この問題に於いて彼は專ら勞働者の意識に關して感情の一面を摘出してゐる。素より勞働態度の如何に關して感情の機能的役割が甚だ重要であることは何人も否定し得ない。しかし少くとも彼の如く問題を限定するためには、感情の機能的役割に關する心理學的理由づけがあつて然るべきである。にも拘らず、これを欠くことは單に讀者に對して不親心であるのみならず、基本的な問題と

して著者自ら反省すべきであらう。第二に彼の研究方法であるが、彼は研究のための眞實な素材を獲得せんとして相當細心の注意を拂つてゐることは事實である。しかし彼の專ら倚據せる主要方法は勞働者の內觀的報告の聽取である。吾々は勞働者心理學の研究に於いて、彼の如く專らこの方法に賴ることの危險を一般的に認めなければならないと同時に、また彼の場合には特に、勞働者の內觀報告が豫め著者との間に理解せられてゐた前述の諸種の感情狀態の表現を以つて充分眞實なものを傳へ得たか否か、或は寧ろ豫めかく設けられた理解のために彼等の內觀報告が多少眞實の事實を歪めて傳へてはゐないか、これ等の疑問を一掃すべき充分の根據は少くとも提供せられてはゐない。

右の如き疑問とも關聯して、私の此處に力說して置き度いことは、勞働者心理學が二つの獨立科學として持つ所の分野を劃然と限定し、またそれ自體が獨立科學としての存在を示し得る科學的體系を持つことの益々必要にして、重要であると云ふことである。既に勞働者が心理學的研究と見做さるべき個別的研究は、假令へ遲々としてゞはあるが、除々に蓄積せられつゝある。そしてこの種の研究をしてより有効のものたらしめるためには、個別的な研究に一定の科學的地位を明言し、これを適當に評價し得る包括的な科學的地盤が存在することが望ましい。個々の問題に關する研究の重要であることは勿論であるが、私は右の意味に於いて勞働者心理學の確立の一日も速からんことを希望して止まないものである。

附言、ハーシーの研究はアメリカに於いても亦ドイツに於いても、共に鐵道修繕工場の男工に就いて行はれたものであつてドイツに於いてはベルリン、ミュンヘン及びルールのミュールハイムの三ケ所の工場が選ばれてゐる。

——昭和十一年九月二十日稿——

中澤辨次郎監修「輪中聚落地誌」

小池基之

「輪中」とは木曾川河口より木曾・長良、揖斐の三大河川流域海拔十五米線內の扇形地帶に於て、この低濕地に居住する人々が、水の過多に對する防禦・保護方策として、且つ生存權掩護のため、此の三大河川の合流地域に網流する幾多の大小諸支流、諸派川によつて圍繞せられた低濕地の一區域毎に輪形堤を設け、その築堤を以て圍繞する所の特定の一區域を指すものである。（別頁五—六頁、本文三頁、五二八頁）本書に從へば、その當初に於ては移住者が戶毎に個人的自然防禦として其の住居及び耕作地の周圍に蟻垤程の周形堤を設けたものが、洪水に對する協力的必要から、各隣接者と協力して、より大なる住居、耕地を圍繞する輪形堤を築いて、特定水防地帶及び定期增水地帶に自發的に限定的な一共同單位を構成するに至つたこの「輪中」は、「水防地帶、水害地帶に居住する人間聚落の地域的並に空間的に獨立した社會關係の一塊をなしてゐるが故に、此れを「自然的地域」、「自然的社會」（The Society of the Rural Life）とも稱することを得」、又「輪中」內の生活は「有機的な相互に關係し合つてゐる全體を構成してゐるので」、「他面より之れを見れば「輪中」は連帶的、協同共援關係の所產にして、同一利害關係の下に立つ村落の複合體たる村落團體（Dorfgemeinde）である」と規定されてゐる。（三三七頁）從つて封建社會內に於ては二つの共同自治體を